

一般教育総合コース

日本と外国

1970年度



お茶の水女子大学

目 次

「日本と外国」序説	堤 精 二	1 頁
第 一 講 日本思想の構造	勝 部 真 長	2 頁
第 二 講 日本と外国の体力と精神力	渡 辺 俊 男	3 頁
第 三 講 家族関係にみる日本的特性	湯 沢 雅 彦	4 頁
第 四 講 日本の生活造形	谷 田 関 次	5 頁
第 五 講 日本の近代化と中国の近代化と	市 古 宙 三	6 頁
第 六 講 日本と外国 一政治体制を中心として一	蠟 山 政 道	7 頁
第 七 講 音楽における東洋と西洋	大 宮 誠	8 頁
第 八 講 日本の生物学	太 田 次 郎	9 頁
第 九 講 “表わす”ということ	亀 谷 俊 司	10 頁
第 十 講 日本の食生活と外国の食生活	稲 垣 長 典	11 頁
第十一講 シンポジウム 日本の文章 外国の文章	波多野完治・他	12 頁
第十二講 教育と社会との つながりの国際比較	河 野 重 男	15 頁
第十三講 日本の気候と世界の気候	荒 川 秀 俊	16 頁

総合コース 「日本と外国」 序 説

1956年に始まった本学の総合コースも数えて15回目になる。その間、いく度かの試行錯誤を繰返しつつ、総合コースという大学教育における新しい形態を育てて来た訳である。まだ、解決しなければならない諸問題を蔵してはいるが、それは今後とも教官と学生が英智を傾けて改善に努力することとして、総合コースの理念であるところの、広い視野に立って物事の根源を見つめる眼を養うことは、ある程度の効果を生んでいると思われる。げんに、他大学にあっても、本学の試みに多くの関心を示し、実行に着手しはじめている。これらの他大学の総合コースは本学のものと、方法的には多少の異同はあっても、そのめざすものはまったく変わらないのである。

さて、本年度はテーマとして「日本と外国」を選んだ。明治開国以来日本人は西欧文明を摂取するのに急であった。その意図はほぼ達成され効果はあがったであろうが、一方ではようやく欠陥も指摘されはじめた。それは何によるのであろうか？ やみくもな摂取や、無批判的な西欧尊重による自己喪失ではなかったか？ ここで、「日本とは何だろうか」ということを冷静に分析して見る必要があるはずである。従来の総合コースが重視してきた方向に、学生の講義に対する姿勢を受動的なものから能動的なものに前進させる点が挙げられる。だとすれば「日本と外国」というテーマほど適切なものはないではないか。なぜなら、このテーマは諸君一人一人の問題であるからである。一例をあげるならば、ノーベル文学賞を受賞した川端康成が、自分の受賞は「翻訳によって審査されたのをゆえとして辞退したらどうか」という気持を持っていたこと（「鳶の舞ふ西空」）に、私は日本と外国の間に介在する私自身関心のある問題を思うのである。各教官の講義を受講する前に、みずからの手によって十分な検討を加え、根深い問題意識を用意されんことを切望してやまない。

堤 精 二

第一講 日本思想の構造

勝 部 真 長

序 日本文化の重層性

日本思想の6つの流れ

1. 古代宗教国家 一尊皇心の形成
2. 大化改新 一国家理想と美的教養の形成
3. 鎌倉幕府の成立一武士道と日本仏教の形成
4. 戦国争乱 一下剋上（実力主義）の社会
5. 徳川鎖国 一秩序と平和消極主義の形成
6. 明治開国 一東西文化統一への試み

参 考 書 一和辻哲郎「日本倫理思想史」上・下 岩波書店
一勝部真長編「日本思想の構造」（現代のエスプリ）至文堂
一G. サンソム「日本文化史」（福井利吉郎訳）創元社
一R. N. ベラー「日本近代化と宗教倫理」（堀・池田訳）未来社

第二講 日本と外国の体力と精神力

渡 辺 俊 男

日本人の頭脳は地球上のすべての民族のうちでも極めて優れているが、一方体格面では、ビルマ、タイ、南ベトナム人を除けば最低の如くみえる。しかし日本人と外国人の体格の相違を量の点で比較するだけでは意味がない。日本人の勤勉さは食糧補給の難渋さだけではなく、短い「振り子」がよく動くような型のものである。

日本人は外国人と比べて脚が短く、胴が長い。外国人の対話は倚坐か直立した相互の間で交されてきたが、日本人同志の対話は坐ったままで行なわれてきた。静坐しての話が行動に移るまでにはより多くの時間を要することになる。かくして日本人のものの考え方や生活様式は体格によっても支配されている。

参 考 書

福田邦三 日本人の体力 杏林書院
加藤橘夫 青少年の体格と体力

第三講 家族関係にみる日本の特性

湯 沢 雅 彦

近代化の進行にもかかわらず、第二次大戦前の日本家族が、国家法を背景とし、教育によって強制された日本文化特有な家族制度すなわち「家」の制度を規範としていたことはよく知られているが、「家」制度を廃止した戦後においても、諸外国と比較したとき、なお異質な家族関係を維持していることは、あまり気づかれていない。相対的にいって、夫婦一体観が乏しく親子関係が強いことを中心とするわが国の家族関係はなぜ西欧のような家族関係にならないのか、その原因を、家族内の権威や役割、結婚観、社会構造との関連等から考察してみたい。

参 考 書

- E. F. ボーゲル（佐々木徹郎訳）「日本の新中間階級 — サラリーマンとその家族」誠信書房
- R. ベネディクト（長谷川松治訳）「菊と刀」社会思想研究会
- A. T. V. メーレン編（日米法学会訳）「日本の法 — 中巻」東大出版会
- 日本ユネスコ国内委員会編「第9回国際家族研究セミナー報告書」同委員会
- 神島二郎「日本人の結婚観」筑摩書房
- 牛島義友「家族関係の心理」金子書房
- 東大公開講座「家」東大出版会
- 増田光吉「アメリカの家族・日本の家族」日本放送出版協会

第四講 日本の生活造形

谷 田 関 次

生活造形（広義の機能的造形 — 建築、造園および諸工芸、工業意匠）においては、絵画や彫刻におけると同じように造形意志の現われを見ることができるとし、それが生活に密着している故に一層それらを造った人々の気質を示すとも言える。

空間分割の様相はすべての造形の基本として諸民族、諸文化の造形意志の特質を示すものである。そこで日本の生活造形における空間分割のあり方を実例によって指摘してその特性の主なものを明かにするとともに、それと関連して日本の造形における自然感情と気分象徴の問題についても触れることとした。

参 考 書

- 講義にはスライドを使用するが、各種の美術全集、工芸関係の図録などで工芸作品の実例に接しておくことが望ましい。
- 造形意志の基本的な考え方については、
- W. Worringer, *Abstraktion und Einfühlung*. (岩波文庫に訳本「抽象と感情移入」がある) が有用であろう。
- なおこの講義の主題に直接関係あるものとしては、谷田、生活造形の美学（光生館）がある。

第五講 日本の近代化と中国の近代化と

市 古 宙 三

日本が西洋の近代文化に接し、これを摂取していく過程とその結果を、中国のばあいとを比較考察して、同じく東アジアに位する日本と中国のそれぞれの特性を明らかにする。

参 考 書

中山伊知郎 日本の近代化（講談社 現代新書，1965）

E. O. ライシャワー 日本近代の新しい見方（講談社 現代新書，1965）

井上 清 日本の「近代化」と軍国主義（新日本新書，1966）

遠山 茂 明治維新と現代（岩波新書，1968）

M. B. ジャンセン編 日本における近代化の問題（岩波書店，1968）

岩村三千夫・野原四郎 中国現代史（岩波新書，1964）

小島祐馬 中国の革命思想（筑摩叢書，1967）

竹内 実 中国の思想 — 伝統と現代（NHKブックス，1967）

筑摩書房 講座・中国（5冊，1967—68）

大修館書店 講座・現代中国（3冊，1969）

市古宙三 中国の近代（河出書房「世界の歴史」，1969）

第六講 日本と外国

—— 政治体制を中心として ——

蠟 山 政 道

1. 国家の近代化過程 — 日本と外国との比較基準
2. 政治体制を基準とした日本と外国との比較
3. 現代国家としての日本の政治体制の特徴
4. 世界の中における日本とその役割 — とくに開発途上国に対して

参 考 書

アーノルド・トインビー

『歴史の研究』（「世界の名著」第61巻）（蠟山政道解説）

ロベール・ギラン 『第三の大国日本』（井上 勇訳）

ハーマン・カーン 『日本未来論』（読売新聞社編）

第七講 音楽における東洋と西洋

大 宮 誠

1. 楽器の問題

東洋の楽器と西洋の楽器の現在の形態は、一見ひじょうに相違しているように見えるが、もともとペルシャを中心として、楽器の東流と西流との歴史があった。したがって、東洋と西洋の楽器には、同じ発音原理をもっているものがすくなくない。

しかし、長いあいだに、東洋の楽器には原形をとどめているものがすくなくないが、西洋の楽器は合理化の歴史をしめした。こうした傾向は、スライドによる形態の観察と、録音による音色の試聴とによって確めることができる。

2. 奏楽の環境

音楽は、つねに音楽を必要とした環境と密接に結びついて展開してきた。大まかに考えても、(A)儀式、(B)宗教、(C)宮廷、(D)舞踏、(E)市民生活などの環境が挙げられる。こうした音楽をとりまく環境を考察することによって、音楽に対する東洋人と西洋人の考えかたのちがいが明らかになるであろう。

講義にあたっては、スライド、録音テープ、レコード等を使用し、専門的な問題を避けつつ、文化の問題として捉える方針である。

第八講 日本の生物学

太 田 次 郎

自然科学に国境はないといわれるが、その発達のしかたを調べてみると、国により違いがみられることがある。特に、わが国の自然科学は、米食文明による農耕民族としての伝統的な思想と、おもに明治維新以後に移入された近代的な自然科学とが、完全に融和されないで共存しているように思われる。

本講では、日本人の伝統的な自然観を、日本の風土、稲作文化、生活様式などからながめ、肉食文明のヨーロッパの自然観と比較して論じる。また、明治以後の進化思想のわが国における影響を中心にして、日本の生物学の特徴を考えてみたい。

参 考 書

- 筑波常治 「米食・肉食の文明」 NHKブックス
和辻哲郎 「風土」 岩波書店
村上陽一郎 「日本近代科学の歩み」 三省堂新書
八杉龍一 「進化論の歴史」 岩波新書
柴谷篤弘 「生物学の革命」 みすず書房
中村禎里 「ルイセンコ論争」 みすず書房
八杉龍一 「進化学序論」 岩波書店

第九講 “表わす”ということ

亀 谷 俊 司

4年ばかり前のこと、カルフォルニア大学のArens教授が来日されたおり、レセプションの席で、教授が冗談に、「犬の鳴き声を日本語ではなんといいますか？ 英語では bow wow, フランス語では ouâ ouâ, ドイツ語では wau wau, …… 世界中どこでも犬の鳴き声や猫の鳴き声が違っているはずはないのに、国によっては異なっているのはどういう訳でしょうね、面白いことではないでしょうか？」といわれた。この問いについて考え、またこれに対してある種の答えを与えることを試みたいと思う。

参考文献

“表わす”ということ 亀谷俊司 数理科学 5 (1966)

特集 集合と位相 (ダイヤモンド社発行)

第十講 日本の食生活と外国の食生活

稲 垣 長 典

各国の食生活を研究するためには先ずその実体を知る必要がある。それには広い視野の資料 (dietary information) を得ることである。すなわち摂取される食型態の評価 (dietary assessment), 調査対象への設問調査 (questionnaires), 食物摂取に対する目録 (records) などの資料をととのえる必要がある。それらのデータをもとにして栄養摂取の状態ならびに臨床医学的あるいは生物学的見地から検討を加える。このような資料から各国の国民栄養状態を知ることができる。

各国民の食型態は長い歴史を持ち、その間には何回かその変化が行われ固定して行く。

食型態の変化は人から人へ、食物から食物へと連鎖反応的に起り、これが各国の食生活となる。そこで現在の日本人の食生活の変化過程を述べるとともに日本の食生活と外国特にアメリカの食生活とを比較検討して、米食に対する考え方より日本人の正しい食生活について述べる。

第十一講 シンポジウム 日本の文章・外国の文章

第1回 言語にあらわれた論理 第2回 言語にあらわれた感情

波 多 野 完 治

外 山 滋 比 古

頼 惟 勤

中 川 信

柳 田 為 正

はじめに

シンポジウムについて

昔のシンポジウムといまのシンポジウム

比較方法の問題

文化や文学など、人文科学の領域で、「比較」ということが大切になってきた。これはもちろん、19世紀なかば「比較言語学」の学問的成果に刺戟されてのことだが、「比較言語学」の青年文法学派が自然科学にひきずられることが多かったのに対して、こんにちの比較には人文科学特有の配慮があり、それが「比較文化」や「比較教育」など、比較科学の成功をもたらしているようである。

そこで、このシンポジウムでは、まず、比較の各人文科学における方法論的意義を、みなさんに少しずつ話していただき、それから本題に入りたい。

本題は、「日本の文章・外国の文章」というので、「文章」にあらわれた思考のちがうところや同じところを「比較」方法で考えようというのである。この問題を少しひろく解し、

第1回 言語にあらわれた論理

第2回 言語にあらわれた感情

という風にして、みんなで研究することにした。

第1回 言語にあらわれた論理

これには、日本語の主語省略とか、述部の後置と、その結果あらわれる「主語述語」の対立の不明確化とかいろいろあるが、ここでは、芭蕉の「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」とその英訳文

A. In the utter silence of a temple. A cicada's voice alone penetrates the rock. (湯浅信之訳 外山, 読者の世界)

B. Stillness: into the rocks pierce locust voices.

(Arnheim: Visual Thinking, 1969)

を、日英文、英文二つづつ、対照しながら訳文の出来ばえや、日本語的表現と英文表現とのちがい、また、そこにあらわれた心性の異同などについて研究したい。

第2回 言語にあらわれた感情

ここでは、日本語のてにおはの微妙なちがいなども討論のテーマになりうるが、わたしとしては、感情をもっぱら「レトリック」に表現されたものとみて、日本のレトリックと外国のレトリックとの比較をみなさんにききたい。そのための資料として、久野収氏のつぎの「主張」を研究主題にえらびたい。

「明治開国以後には、近代科学の輸入を通じる認識のロゴスの一方的発展が支配して、啓蒙過程は、認識のロゴスの上から下への普及過程にとどまってしまい、その上に、戦後は大衆社会の一方的マスコミの圧倒的支配が実現する結果になって、レトリックのロゴスは、とうとういちども社会的ロゴスの中で、支配的位置をしめた経験をもっていない。日本のデモクラシーの弱さは、そこにひそんでいるのだ、とみなしても、それほど見当はずれではないとおもいます。

そういう日本型共同体においては、説得力のかわりの役目をするのは、一方的語りにです。『平家物語』の琵琶法師たちの語りものからはじまって、われわれ自身は、非常に多くの語りもののジャンルやテクニクをもっておりま

す。浪花節、講談、落語、すべてそうであります。語る人のパトスが聞く人のパトスに乗りうつって、そこに集団的パトスの共有という現象が生じ、そうしたパトスがやがて実践への案内役をつとめる。社会的理性は、認識のロゴスとして専門家の中で実現され、そこから下に普及するという過程をとっています。」(久野 収 「三木哲学におけるレトリックの論理について」 『思想』 1967年10月11月号)

第十二講 教育と社会とのつながりの国際比較

河 野 重 男

昨年12月から本年にかけて、主としてイギリス・アメリカを中心に「教育と社会のつながり」を観察する機会を得た。この体験をもとに、自分が見聞し、考察したことを日本との比較において述べたい。

第十三講 日本の気候と世界の気候

荒 川 秀 俊

昨年度の一般教育総合コースの主題は、“人間と環境”であったが、本年度は“日本と外国——日本の特性とは何か”である。日本と外国とを、比較検討しつつ、環境の科学 environmental science の側面から見て、長い年月の間に培われた日本の特性を論じてみるのが、意図であるように思われる。

気候もしくは風土の面から、日本の国民性について考察した労作は、数多くある。(文献参照)。私は、日本の気候と世界の気候を総合的に比較考察することによって、この問題への一つのアプローチを試みてみたい。

気候を規定する因子

熱帯・温帯・寒帯

熱帯地方の生活

寒帯地方の生活

温帯地方の生活

気 温

日射と日射を受ける角度

北回帰線と南回帰線

気温と緯度

晴れた夜とくもった夜

体感温度——気温調節

気温と家

気温と着物

気温と食物

風

風向と風速

風速の日変化・年変化

季節風

貿易風

前線・低気圧・高気圧・熱帯低気圧(台風)

風と火事・防風林

風の害と風の効果——大気汚染

雨

雨の量——日本の平均年雨量

雨の多い土地と少ない土地

雨期と乾期

ひでりとなが雨

強い雨と大雨

洪水

密林のおいしげる熱帯の土地とさばく

人工降雨

雪

いわゆる表日本と裏日本

初雪・積雪・大雪

雪おろし・雪がこい

雪と交通

雪の利用と雪の害

気候の改造

恐ろしい自然の破壊

巨大建築物の出現による風の異常

多目的ダムの建造と川筋の変更

日本列島の中央脊梁山脈を削りとったら

台風をそらす構想

数値実験（もしくはシミュレーション）を繰返すことによる気候改造計画の国際管理の必要

参 考 書

芳賀矢一著 国民性十論 明治40年12月刊

（富山房文庫の1冊として再刊さる）

和辻哲郎著 風土 昭和10年9月刊

藤原咲平著 我国の気候と其の国民性に及ぼす影響

（このパンフレットは、もと文部省教学叢書として刊行されたが、のち“気象感触”昭和17年10月刊に収められている。）

私も最近、次のような著書を出した。

H. Arakawa, ed., Climates of Northern and Eastern Asia, Elsevier Publishing Co., 1969, pp. 1—248.

講 義 日 程

（講義日時＝土曜日第三・第四時限 10:20～12:00）

月	日	系列	担 当 講 師	月	日	系列	担 当 講 師
4	18	序説	堤 教 授	10	24	人文	大 宮 教 授
	25	人文	勝 部 教 授		31	〃	〃
5	2	〃	〃	11	7	自然	太 田 教 授
	9	自然	渡辺(俊) 横浜国大教授		14	〃	亀 谷 教 授
	16	〃	〃		28	〃	稲 垣 教 授
	23	社会	湯 沢 助教授	12	5	〃	荒川(信) 助教授
	30	〃	〃		12	人文	シンポジウム 波多野 教授他
6	6	人文	谷 田 教 授		19	〃	〃
	13	〃	〃	1	16	社会	河 野 教 授
	20	社会	市 古 教 授		23	〃	〃
	27	〃	〃		30	自然	荒川(秀) 東海大学教授
9	12	社会	蠟山 名誉教授	2	6	〃	〃
	19	〃	〃		13		セ ミ ナ ー
	26		セ ミ ナ ー		20		試 験

